ズレイハをとりまく光
グゼリ・ヤーヒナ『ズレイハは目を開ける』の魅力

守 屋 愛

はじめに

小説『ズレイハは目を開ける «Зулейха открывает глаза»』[1] は，ロシア大手出版社 ACT が優秀な現代ロシア文学作品を世に送り出すために，文学者であり編集長であるエレナ・シュビナ氏の名前を掲げて立ち上げたブランド『エレナ・シュビナ編集』から 2015 年に出版された作品である。本作はその年に，まず『ヤスナヤ・ポリャーナ賞』の『21 世紀部門』で最優秀作品となった。その後，国内最大の文学賞である『ボリシャヤ・クニーガ（大きな本）賞』で一位に輝くとともに，同時に行われた読者投票でも一位となり，大きな話題を呼んだ。

この快挙で一躍時の人となった作者のグゼリ・ヤーヒナ Гузель Яхина は，カザン出身のタタール人女性作家であり，本作品『ズレイハは目を開ける』は彼女が書いた初めての長編小説である。

グゼリ・シャミレヴナ・ヤーヒナ Гузель Шамилевна Яхина は 1977 年 6 月 1 日にカザンで，エンジニアの父と医者の母の間に生まれた。カザン国立教育大学外国語学部英独語学科を卒業したのち，モスクワに出てマーケティングや PR，広告業界で 13 年間働いていた。その一方で，モスクワ映画スクールの脚本科を修了し，短編小説『蝶 «Мотылёк»』（2014 年）や『ライフル銃 «Винтовка»』（2015 年）を文芸誌に発表している。

しかし，実質的な文壇デビューはこの『ズレイハは目を開ける』であると言えるだろう。彼女の華々しいデビューについて，先輩作家のリュドミラ・ウリツカヤは，小説に寄せた前書きで次のように述べている。「わが国には，帝国に住む諸民族のいずれかに属しながらロシア語で執筆をした，二つの文化をもつ素晴らしい作家の一団がいた。ファジリ・イスカンデル，ユーリー・ルィトヘイ，アナトーリイ・キム，オルジャス・スレイメノフ，チンギス・アイトマートフ…。［中略］新しい散文作家，若いタタール

[1] 本文テキストは *Яхина Г.* Зулейха открывает глаза. М., 2017 を使用。以下，引用に際し，頁数のみを記載。

女性のグゼリ・ヤーヒナがやってきて，いとも簡単にこの巨匠たちの列に並んでしまった。」[2] また，N. セルゲエワも,「あっという間にグゼリ・ヤーヒナは，いとも簡単に現代ロシア散文の有名な太陽たちと同列に名を連ねることができる作家になってしまった」[3] とそのデビューを評価している。

『ズレイハは目を開ける』での鮮烈なデビューから，今に至るまでヤーヒナの快進撃は続いている。ヤーヒナは多くの新聞，雑誌のインタビューを受ける。2018 年 4 月には，2004 年から実施されている全国規模のロシア語啓蒙イベント『トータル・ディクテーション』の招待作家として課題テキストの作者を務めた。また新作の小説『私の子どもたち «Дети мои» 』（2018 年）も 2019 年の『ボリシャヤ・クニーガ賞』の最終候補に挙がるなど，有名作家として確固たる地位を着実に築いている。

さらに，この『ズレイハは目を開ける』が話題となっているのは，その翻訳された言語の多さにもある。現在日本語も翻訳が進行中だが，すでに世界 36 言語の出版社と契約を結び，20 言語以上がすでに出版されている。[4]

現代の人々の心をこれほど強く引きつける本作品の魅力はどこにあるのだろうか。次々と事件が起こり，次に何が起こるのかジェットコースターのような息も切らせぬ物語の展開，長編でありながら矢継ぎ早に読み進められてしまう文体，プロットのそこここに仕掛けられた無数の暗示を解いていく楽しみ。その他にもたくさん挙げることができだろう。こうしたこの小説を魅力的にする要素はこの物語を何重にも覆っており，それはヤーヒナの作家としての高度な技術が高く評価される所以でもある。文体のレベル，モチーフのレベル，ジャンルのレベルなど，多層の構造のそれぞれに丹念な細工が施されており，この小説は論点に事欠かない。

そこで本論文は，日本でまだほとんど知られていないこの作品の紹介を兼ねつつ，この作品に内在する無数の論点のうち，とりわけ特徴的で内容のとらえ方に関わる問題である,「光のモチーフについて」，そこから論を発展させて作品の評価を大きく分けている「民族性について」，さらに現代性を象徴するような本作品の「映像性について」に絞って考察する。

---

[2] *Улицкая Л.* Любовь и нежность в аду. Предисловие к роману «Зулейха открывает глаза». М., 2017. С. 5.

[3] *Сергеева Н.* Гузель Яхина. Зулейха открывает глаза // Звезда. 2016. № 1. [https://magazines.gorky.media/zvezda/2016/1/guzel-yahina-zulejha-otkryvaet-glaza.html] (2019 年 8 月 15 日閲覧).

[4] [http://www.elkost.com/authors/yakhina/books/1837-zuleikha-opens-her-eyes] (2019 年 8 月 15 日閲覧).

1. 物語の進行とズレイハを取り巻く光

『ズレイハは目を開ける』という題名は，実際の動作を表わすと同時に，象徴でもある。日本語訳の中には，なにか新しい知識を得るという象徴の意味に重きを置いて『ズレイハは目を開(ひら)く』としているものも多い。[5] だが，この『ズレイハは目を開ける』は題名であるばかりでなく，この小説を貫くキーフレーズである。物語中，このフレーズはさりげなく，読者が気づくか気づかないかというほどの間をあけて，繰り返される。しかも，目を開けたときの情景描写がだんだんと変わっていくのである。この点について，S. ネメジコワも，物語の進行に伴ってズレイハは 5 回，目を開け，回を追うごとにズレイハが目にする光は大きくなり，勇気と精力がより求められる新しい状況に目覚めると述べている。[6] 本作品に現れる「ズレイハは目を開ける」というフレーズ，その 5 回をキーポイントとして，以下，ズレイハの置かれた状況と，彼女をとりまく光について考察する。

物語は，1930 年，カザン郊外のユルバシ村に住む 30 歳の緑色の目をしたズレイハの目覚めから始まる。イスラム教徒のタタール人である彼女は，すべてにおいてアッラーの御心に頼りつつ，同時に森の精霊たちの存在も信じている。夫ムルタザは 15 も年が離れた厳しい家長であり，家にはズレイハが「鬼婆(ウヴィリーハ)」と心の中で呼ぶ邪悪な義理の母が同居している。伝統的なタタールの生活のなかで，ズレイハは，自らの意志で決定することを知らず，ただただ怠け者と言われることを恐れ，働きづめに働くことしか許されない日々を送っていた。この長編小説は，未明に家で目覚めたときの描写，

> ズレイハは目を開ける。暗くて，穴蔵の中のよう。［C. 9］

で始まる。彼女のまわりに光はない。

多くのインタビューでヤーヒナはこの物語が家族の物語であり，自分の祖母のライサ・シャキロヴナがモデルであると認めている。[7] 祖母のライサが 7 歳のとき両親が富農として糾弾され，家族全員がシベリアのアンガラ河岸に移住させられている。祖母に聞いた話がこの物語の基礎にある。また作品中で実在する人物がいるかという問いに対して，ヤーヒナは「鬼婆(ウヴィリーハ)です。唯一彼女にはプロトタイプがいます。それは

---

[5] RUSSIAN BEYOND をはじめ，主に『ボリシャヤ・クニーガ』の受賞を報道するマスコミの訳出にこのバリエーションが多い。[https://jp.rbth.com/arts/2015/12/15/550913] (2019 年 9 月 15 日閲覧).

[6] *Немежикова О.* Сказание о Семруке и Прекрасной Зулейхе // День и ночь. 2017. № 4.

[7] *Пульсон К.* Большая карта для маленькой Зулейхи // Российская газета. 17. 11. 2015.

私の曾祖母で，厳しい性格をしていました。彼女のことは親族の話や古びた写真で知るのみですが，写真には，眉までプラトークをかぶった盲目の老婆が映っています」[8] と答えている。

一見，始まりは日常のなかの一日であり，富農として弾圧され強制移住を命じられ，故郷を後にしてから彼女には地獄の生活が始まるように見えるのだが，ズレイハのまわりは暗闇ではじまる。その一方で，不思議な逆転現象が起こる。それは，夫を殺され，義母を置き去りにされて，ズレイハがほかの強制移住者たちとカザンに連行される途中，ソビエト政権によって家畜小屋にされた荒廃したモスクで一夜を過ごす。本来ならば男性しか入ることのできないモスクの区画に入る。そのような行為はムスリムの女たちにしてみれば罪であった。ところが，その夜，ふと目を開ける彼女のまわりに光のかすかな気配が感じられるのである：

> ズレイハは目を開ける。あたりは，震える灯油ランプの光がかろうじて生みだす鬱蒼とした薄闇の中，強制移住者たちが眠っている。［C. 104］

このあと，ズレイハと強制移住者たちは長く恐ろしい移動の旅を続ける。最初は列車での移動だったが，列車は目的地が定まらず果てしない放浪のような移動を半年も続けた。クラスノヤルスクでついに降車した後に，彼らを待ち受けたのは，多くの者に死が待ち受けるバージ船である。身重ゆえ気分が悪くなったズレイハ一人，鉄格子の中から出されて甲板で休む。そして，毒入りの砂糖を触りながら，いつ死ぬべきかと考えながらまどろんでいた後，次の「ズレイハが目を開ける」のフレーズが繰り返される：

> ズレイハは目を開ける。やわらかいバラ色の夜明けの霞の中で，あたりの物すべてがゆらゆら揺れて飛んでいるよう。［C. 216］

地獄の恐怖に突き進む物語の線上にあって，周りの人々が力尽きて次々に死んでいくのに対し，死の恐怖の中にありながらも逆に，ズレイハのまわりの光は少し力を増す。ちなみに，この移住者を乗せたバージ船が沈没する物語は，ヤーヒナの祖母が目の当たりにした事件だという。祖母とその両親はそのバージ船の後を行く二艘目に乗っ

[8] Там же.

ていた，ヤーヒナはこの話をもっとも頻繁に思い出すという。[9] それもあってか，このバージ船のシーンはとりわけ迫力をもって描かれ，緊迫感が伝わってくる。

その後，ズレイハを取り巻く光への言及はしばらく現れない。次に現れるのは 8 年後で，その時には，光はその力をさらに増す：

> ズレイハは目を開ける。太陽の光が，古くなった更紗のカーテンの間から洩れて，丸太でできた壁の赤茶けた湾曲を這い，ヤマドリの羽の黒いさきっぽが突き出した，花模様の木綿織の枕の上を這い，さらに — やわらかな，光に透けてバラ色のユーズフの耳の方へゆっくりと進んでいる。［C. 386］

厳しい環境に耐えて，開拓した居住地セムルークでの生活が日常に変わった。銃の腕を見込まれて猟師となったズレイハが，密林（ウルマン）へ狩猟に出るため早朝に起きたときの描写である。病院の一室に居を構え，最愛の息子と暮らし，女が狩りをするなど，ユルバシ村にいた頃では想像もつかない生活を送る。そんな彼女から太陽の光をさえぎるものは更紗のカーテンのみ。そして，最後のフレーズに向かって，光は強さを最大限に放つ：

> ズレイハは目を開ける。太陽が差し，目をくらませ，頭を締めつける。あたりは，太陽の光の輝く輪舞の中で，かろうじてそれとわかる木々の輪郭が震えている。［C. 500］

物語のクライマックス，レニングラードで絵画の勉強をしたいという，最愛の息子の願いをかなえ，旅立たせる緊張と別離の悲しみに耐えるズレイハは光に包まれる。しかも，目がくらみ，頭を締めつけるほどの光である。物語の最初の真っ暗闇から，彼女のまわりに光がだんだんと着実に，最後にはこれ以上ないほどの強さとなって光が降りそそぐ。

この物語は，ともすれば，楽ではないにしても平穏な生活を送っていたタタール女性が家族と故郷を奪われ，強制移住をされられ恐ろしく辛い人生を送る悲劇となってしまいそうだが，決して主人公は話が進行するにつれて不幸になっていくだけではない。それどころか，ヤーヒナは物語の進行とともに彼女のまわりの光の強さをクレッシェンドしていくことによって，あらゆる苦労を経験しても生き抜き，自分の意志を持つようになり，成長していく彼女を強く肯定している。それはズレイハ自身の次のよ

[9] Там же.

うな自己肯定にも表れている：

> 最近突然わかったのは，運命が彼女をここに放りこんでくれてよかったということだ。国有医院の小さな一室で，血縁のない人々の中に暮らし，よその言葉を話し，男のように狩りをして，三人分働いているけれど，彼女は — よかった。幸せというわけではない，それは違う。でも，— よかった。［C. 395］

ズレイハは故郷のユルバシ村に帰るわけではない。ウリツカヤの前書きの言葉を借りるなら「地獄」[10] に留まるわけだが，だからといって，物語は悲劇的に終わるわけでもない。ヤーヒナは，インタビューで相手からの「思いがけずハーモニックで明るい結末になりましたね」との指摘に答えて，物語の結末について「このような物語ではハッピーエンドにするわけにはいきませんでしたが，悲劇的で喜びのない調子で終わらせたり，読者にすさんだ気持ちのまま終わらせることもできませんでした。結末は自らやってきたのです」[11] と述べている。

自らやってきた結末は明るいものだった。それはズレイハを取り巻く光が物語の全編を通して少しずつ強さを増してきた当然の結果だった。従来の生活から無理やり引き離されて，地獄のような苦しみを味わっても，それでもなお強い肯定感が残る。M. アバシェワと B. アバシェフは，マーガレット・ミッチェルの『風と共に去りぬ』に出てくる，飢餓の時と製材所の時のスカーレット・オハラにズレイハが似ていると指摘した。[12] 強く生き抜く女の姿である。また，V. ボリソワは強制移住者たちのアンガラ河岸での生活の描写は，ロビンソンクルーソーのようなサバイバルという世界的な物語を含んでいる [13] と述べている。

第一部でズレイハの命は風前の灯のようにはかなげに見えた。いつも的中する不思議な予言をする義母の「鬼婆（ウブィリーハ）」がズレイハに「おまえはもうすぐ死ぬ」と予言したのだから。ところが，ズレイハをとりまく光が強さを増すと同じように，死の淵を行くようなはかなげだった「生」も徐々にゆっくりとその光を増していく。この「生きる」というキーワードは，まさにこの小説でもっとも長い第三部の題名である。物語が進

---

[10] *Улицкая*. Любовь и нежность в аду. С.5.

[11] *Пульсон.* Большая карта для маленькой Зулейхи.

[12] *Абашева М., Абашев В*. Книга как симптом: как сделан роман Гузели Яхиной «Зулейха открывает глаза» // Новый мир. 2016. № 5. С. 177-182.

[13] Valentina Borisova, “The Novel “Zuleikha Opens Her Eyes” by G. Yakhina: the Conflict of Receptions in the Context of the Regional, Russian and World Literature (on the Problem of National and Cultural Identity),” *Journal of Siberian Federal University. Humanities & Social Sciences* 5 (2017), pp. 654-660.

むにつれて光とともに増していく肯定感は，ゆるぎない「生」への肯定でもある。

2. 民族性から人間性へ

本書に前書きを寄せたウリツカヤは，ヤーヒナを高く評価して，次のように記した。「ファジリ・イスカンデル，ユーリー・ルィトヘイ，アナトーリイ・キム，オルジャス・スレイメノフ，チンギス・アイトマートフ…。この一派の伝統は，民族的な題材の深い知識であり，他民族の人々に対する尊厳と敬意に満ちた態度であり，フォークロアのデリケートな取り扱いである。［中略］ 新しい散文作家，若いタタール女性のグゼリ・ヤーヒナがやってきて，いともたやすくこの巨匠たちの列に並んでしまった。」[14] 『ズレイハは目を開ける』はタタール人のズレイハを主人公とし，第一部ではタタール民族の生活が繰り広げられる。しかも，ズレイハは最初の設定としてロシア語があまり上手ではない。であるから，物語中にはタタール語もしばしば使われ，作者のヤーヒナはロシア語読者のために巻末にタタール語の語句と表現の索引をつけている。こうした本作品の民族的要素は誰もが認めるところであり，作者のヤーヒナもタタール人であったことから，いきおい，当初あたかも本作品がタタール文学であるかのような紹介もあった。が，この民族性の問題は大きく評価がわかれるものとなった。

この小説の第一部は，カザン郊外のユルバシ村で暮らすタタール人ズレイハの日常が描かれる。一方では土着の精霊たちも信じつつ，イスラム教を信仰し，その厳しい戒律のもとで暮らす様子である。家は男性用と女性用の区画にわけられ，女は厳格な家長である夫と恐ろしい義母にただただ従っている。イスラム世界に生きるズレイハは頻繁に「アッラー」の名を口にする。すべては「アッラー」によって決められているのだ。

ところが，前章で考察したとおり，物語の進行に伴い彼女のまわりの光が強くなっていく一方で，対照的に物語の中でデクレシェンドされていくものがある。それは敬虔深いズレイハが口にするこの「アッラー」という言葉，すなわち神の名だった。たとえば，この物語全体で 「アッラー«Аллах»」という単語は 32 回現れるが，その 29 回までもが全四部のうち第一部と第二部に集中し，話が進むにつれてだんだんとズレイハの口からこの言葉が消えていく。作品中最後に「アッラー」という言葉が出るのは，第三部の中盤,「アッラー」の不在を確信したズレイハの心情の描写である。物語の三分の一を残し，これを最後に，ズレイハは心の拠り所であり，あれほど口にしていた

[14] *Улицкая.* Любовь и нежность в аду. С. 5.

神の名を言わなくなる。最後の「アッラー」が現れる部分を以下に挙げる。他人に無神論を強制されたわけではない。彼女自身が経験を通して，身をもって祈りの無意味さを悟るのだ：

> 祈ることはまれになり，ささっと済ますようになった。アッラーは彼らのことを見ていないし，聞いてもいないのだと，このあいだ飢えたときに確信した。もし全能の神が，あの厳しい冬にズレイハが捧げた，涙ながらの千回の祈りのうち，たった一度の祈りでも聞き入れてくれたのなら，神はその恵み深き配慮を怠って彼女とユーズフを置いておくなどということはできなかっただろう。［C. 335］

民族的要素は，実は，この作品中でだんだんと弱まっていく。家族と別れ，故郷を離れたズレイハにとって，家族になったのは民族もまちまちな他人である強制移住者たちである。そして，ロシア人をはじめとする他者の考えも受け入れていく。しかも，光の強まりによってそれは強く肯定される。伝統的なタタールのフォークロアから離れていくズレイハを肯定的にとらえたこの作品はもちろん，逆にタタール人批評家たちから強い非難を受ける。タタールスタン作家同盟のメンバーであり，タタールスタン共和国国民作家の称号をもつラビト・バトゥラは特に厳しい批判を発表し,『ズレイハは目を開ける』の民俗や時代考証の誤りを列挙した上，さらに，ユーズフが最後に書類上イグナトフの息子となり，ヨシフ・イグナトフに変わることなどを指摘して，ヤーヒナが言外にタタール民族が消滅する運命だと書いているのではないかと非難した。[15]

では，一方ヤーヒナはどうかと言えば，彼女自身は自分がタタール作家であると述べたことは一度もない。多くのインタビューの中でヤーヒナが繰り返し述べているのは，自分がタタール作家ではなく,『カザンの作家』であるということだ。最新のインタビューの中でヤーヒナはタタール文学との関係性を尋ねられて,「私はロシア語で読み書きをしていますし，もう人生の半分をモスクワで暮らしています。それだから，大体私はタタール文学のプロセスの中にはいませんし，それについてよくわかってもいません」と述べ，さらに「では，タタールにルーツをもつロシア作家ということですか？」という問いに答えて,「ロシア作家についてはわかりませんが，私は自分をカザンの作家と名づけたいと思います。ここカザンでは，ロシア文化もタタール文化も対等に息づいています。だから私には，人生の半分をモスクワで暮らしてはいますが，

[15] *Батулла Р.* Что увидела Зулейха, когда открыла глаза? // Казанские ведомости. 26. 01. 2016.

『カザンの作家』という定義がより近いのです」と述べている。[16] ロシア文化とタタール文化という二つの文化を併せもつ「二文化性」はこの作品の特徴である。そして，この二文化性について，V. ボリソワは「創作作品の言語がロシア語で，幼年期からの母国語が非ロシア語（この場合はタタール語）であるとき,『二文化』の作家という現象は，よく知られているように，ソビエトの多民族文学にとっては特に典型的なものであった。最も印象的な例のひとつは，チンギス・アイトマートフで，彼は当時文化の転移を行い，その結果，キルギス文化はロシア世界の一部となった。しかしながら，G. ヤーヒナはそれほど民族的な文学ではなく，ポスト民族文学の現象である」[17] と述べている。

このように，ヤーヒナはタタール人であり，本作品でタタールの生活や習慣を描いたことで安易に民族的文学とみなされることもあるが，それはまったくの早合点であろう。ヤーヒナが目指したものは民族的収束ではなく，民族の枠を超えて，人間同士の交流，民族の枠を超えて普遍の原理に目を開くことである。ボリソワの「ポスト民族文学」という言葉は，民族の上位概念を用いれば「人間文学」や「世界文学」という概念でとらえることができるだろう。実際，現在，複数の民族文化の併存は，反発を伴いながらも世界規模で進んでいる。『ズレイハは目を開ける』は民族の枠から飛び出して多民族共存を肯定するという現代性を有する作品である。

3．映像性を高める文体

そして，本作品のもう一つの現代性はその映像性にあると言えるだろう。すでに様々なインタビューでヤーヒナ自身が答えているところによると，彼女は 3 年間この小説を温めてきたものの，うまく作れず，最終的に脚本の形で始めたという。脚本で書くことについて彼女は次のように述べている。「脚本を書きあげたとき，これだ，物語が一望できた，という感じがしました。最初はなにか巨大で果てしなく，かなり混沌としたものになって，うまくいかなかったのです。脚本が完成してようやく，どのように物語が作られ，その中でどのような登場人物とプロットのラインがあり，どこでそれらが交わるか，どこですれ違うか，物語の合流地点はどこか，どんなテンポやリズムかということがはっきりわかったのです。すべてが向かうフィナーレがわかる

[16] Гузель Яхина: «Я называю себя казанской писательницей». Интервью с А. Кузьминым // События. 14. 09. 2019.
[https://sntat.ru/interview/guzel_yakhina_ya_nazyvayu_sebya_kazanskoy_pisatelnitsey/] (2019 年 9 月 20 日閲覧).

[17] Borisova, “The Novel “Zuleikha Opens Her Eyes” by G. Yakhina,” (前注 13 参照) pp. 654-655.

ようになったのです。」[18]

この『ズレイハは目を開ける』は脚本を小説に直すという，小説が映像化されるといったよくあるパターンとは逆の作業によってできた作品であることが特徴的である。本作品の映像性は多くの文学者の一致した意見で，M. アバシェワと B. アバシェフは「手法のレベルで一番重要なのは，小説の映像性である。今日，しばしば映画が現代の作者の視覚の場所を決め，叙述の手法や構造に影響を与える。ビジュアル性は疑いようもなく，現在優勢な文化コードである」[19] と述べている。また，И. サヴキナと A. ロゼンホリムは「映画的もしくは，より正確には，連続ドラマ的な詩学の影響が，構成においても作品の言語においても，非常に感じられる。ヤーヒナが，最初は小説ではなく，連続ドラマのシナリオとして書いていたと認めているわけであって，どうやら近い将来，小説を基にして今後制作される連続ドラマが，どこかのロシアテレビ局から出てくるだろう」。[20] この大方の予想はいとも容易に的中し，テレビドラマ『ズレイハは目を開ける』はすでにテレビ局ロシア 1 によって 2019 年晩秋の初放送が決定している。しかも，撮影が終わった作品は，すでに一足早く，6 月に行われた第一回映画フェスティバル «ЧИТКА»[21] で主演男優賞などを獲得している。[22]

しかし，ヤーヒナの真骨頂はただ脚本を小説に書き直したという単純作業ではない。全体的に短い文章で綴られ，変化に富み，猛烈なスピード感のある文体は，500 ページにも及ぶ長編小説であるにもかかわらず，多くの読者に一気に読んだと言わせる。[23]

この作品では，語り手の語りだと思っていた文が，ふいに登場人物の言葉に代わることも多く，従来の語り手のような基準とすべき人物が一定せず，言葉がそれぞれの

---

[18] Гузель Яхина о своей книге «Зулейха открывает глаза», бабушке и сценариях // афишаDaily. 24. 02. 2016.
[https://daily.afisha.ru/brain/613-o-svoej-knige-zulejha-otkryvaet-glaza-babushke-i-scenariyah/] (2019 年 9 月 15 日閲覧).

[19] *Абашева, Абашев*. Книга как симптом: как сделан роман Гузели Яхиной «Зулейха открывает глаза». С.177.

[20] *Савкина И., Розенхольм А*. «Секрет ее успеха»: размышления о романе Гузель Яхиной «Зулейха открывает глаза» // Лабиринт. 2016. № 3/4. С. 22-25.

[21] 映画祭『チトカ(ЧИТКА)』の公式サイト：[https://www.facebook.com/chitkafest/] (2019 年 9 月 17 日閲覧).

[22] Сериал «Зулейха открывает глаза» получил один из главных призов на фестивале «Читка» // Вокруг ТВ. 25. 06. 2019.
[https://www.vokrug.tv/article/show/15613700871/] (2019 年 9 月 15 日閲覧).

[23] ロシアのインターネット販売最大手のオゾン社の『ズレイハは目を開ける』購入のページには，2019 年 9 月 20 日現在，560 名以上の読者からのコメントが寄せられている。[https://www.ozon.ru/context/detail/id/32008502/] (2019 年 9 月 20 日閲覧).

登場人物の言葉にふっとすり替わる瞬間が訪れる。以下に顕著な一例を挙げる。富農を逮捕して連行し，カザンに到着したイグナトフが，親友であり上司であるバキーエフを執務室に尋ね，輸送列車の司令官に任命される場面である。

> 突然 — まるで剣で脳天を叩かれたようだ：輸送列車を護送するのは君だ。どうして俺が?! なぜ俺なんだ?! なんのために?! 了解，もちろん，同志司令官，だが，バキーエフ，友よ，説明してくれ。［中略］俺はここに必要なんだ！それなのに，おまえは俺を — 護送隊に，輜重隊にやるっていうのか…。
>
> バキーエフの珍しく重苦しいまなざしが，鼻眼鏡の金色の輪を通して見える。この件には頼りになる人間が必要だ — 君のようなね，イグナートフ。［C. 145］

上の引用部分を皮切りに，イグナトフとバキーエフの会話部分は特徴的な文体に変わる。全編を通して基本的には語り手が語るスタイルを取りながらも，場面によっては語り手が突然姿を隠す。ここでも，語り手が消え，いきなり登場人物たちの声が錯綜する。バキーエフの声，イグナトフの声が語りの統制から抜け出して，一息に畳みかけてくる。一気にセリフで話が進行する。「誰々は…と言った」という付けたしなどは一切ない。脚本の台詞部分を組み合わせた，こうした書き方は物語のスピード感を一気に上げ，この場面の緊張感が急速に高まる。セルゲエワの表現を借りるならば，「矢のような小説。痛いところに飛んで来て当たる。神経を刺激し，耐久性を試す。さらに，まるで沼の中へと引っ張りこむ。浮かび上がることはできない。一気に読み，恐ろしく残酷な世界へ深く深く沈んでいく」[24] のだ。

また，本作品の文体で顕著なのは「ダッシュ」の多用である。例えば，次の場面は強制移住地へ向かって迷走を続ける列車で，自分の妊娠を知ったときのズレイハの描写だ：

> 妊娠？そうだ，ずっとお腹がすいていた — でも，食べ物がもらえなかったから。そうだ，最近ちょっとお腹が重かった — でも年のせいだと思ったから。月の物も来なくなった — 心労のせいと思った。でも，妊娠なんて — とんでもない…。すごいわ，ムルタザ — 死を騙したのね。自分はもうとっくに墓の中なのに，彼の種は — 生きて，彼女のお腹の中で育っている。［C. 335］

---

[24] *Сергеева*. Гузель Яхина. Зулейха открывает глаза.

この引用部分のダッシュはすべてそのまま文中に残した訳である。このように，小説の中ではダッシュが頻繁に使われているが，ほとんどは文法上，必ずしも不可欠な用法ではない。この点については，ヤーヒナに直接質問したところ，メールで次のように回答を寄せてくれた：

> テキスト中のダッシュはたくさんあります。私にとってこれは，一つの文章中に付加的なアクセントを配置したり，離した言葉によって付加的な重みをつけ加える手法です。そして，同じように，文章をよりダイナミックにし，読者による理解をより容易にするための手法です（文章は短ければ短いほど，よりダイナミックになります）。[25]

おそらく，この「読みやすさ」と「ダイナミック」というキーワードにヤーヒナの文体の秘密があるのだろう。読みやすさはスピード感を持たせる。ダイナミックというキーワードは躍動感につながる。躍動感で動き出す想像は物語の映像性をさらに高める。映像性は現代の人々の生活に，テレビやインターネットを介しいまや密接に結びつき，映像の需要は増すばかりである。であるから，こうした映像性の高い作品は現代の人々の感覚と需要に合致するのであろう。そこに本作品が広く世界で受け入れられる理由の一つがあると考えられる。

4. おわりに

以上，グゼリ・ヤーヒナのデビュー作である『ズレイハは目を開ける』について，論点を絞って考察を行なった。作品内で次第に増していく「光のモチーフ」は物語のなりゆきを強く支持し，なにを失ってもズレイハが生きていくこと，新しい認識に至ることを肯定していく。それと同時に，物語の当初に強かった民族性は次第に弱まり，代わって民族をこえた人間同士のふれあいへとシフトしていく。これを伝える文体はヤーヒナ独特の技法で創り出されたものである。スピードとダイナミックさをもつ文体によって，物語は躍動をし，動きのイメージが脚本的な仕掛けとあいまって，作品の映像性を増しているのだ。

それらはロシア文学のみならず，世界中の言語に訳されて世界文学のシーンに新しい風を入れたと言っても過言ではない，この作品の魅力の一端を説明するものであろう。

---

[25] ヤーヒナは，筆者を含め世界中の翻訳者たちとメールで交流し，本作品の訳出に関する質問に自ら丁寧に答えてくれる。引用部分は 2019 年 9 月 18 日付でヤーヒナから筆者に送られたメールの一部である。

Гузель Яхина «Зулейха открывает глаза» : Образ света и современные визуальные особенности

МОРИЯ Аи

Гузель Яхина появилась в русской литературе в 2015 году со своим романом «Зулейха открывает глаза», который выиграл приз «Большая книга». Она – татарская писательница из Казани, и эта книга – ее первый роман. Она уже подписала контракты с издателями по всему миру, чтобы перевели на 36 языков, и книга уже опубликована более, чем на 20 языках. В чем находится ее мировая популярность? В этой статье мы рассмотрим особенности, присущие этому произведению, и также предложим знакомство с романом, который практически пока неизвестен в Японии.

Фраза «Зулейха открывает глаза», которая также является названием, повторяется в тексте. Каждый раз интенсивность света вокруг героини меняется по-разному. Сначала она находится в тьме, но постепенно становится ярче и, наконец, ослепительно сильный свет окружает ее. Этот свет играет роль подтверждения духовного изменения. Зулейха, которая жила в деревне по строгим татарским традициям, как раскулаченная была сослана в Сибирь. Но это не становится трагедией, а, напротив, осевещает ее духовный рост.

Первая глава - это подробное описание жизни и обычей татар, на первый взгляд этот роман – типичная этническая литература. Но после изгнании героини автор описывает лучшее взаимодействие между людьми без этнических границ. Этот роман ценит общую человечность.

И еще одна современная особенность является в стиле текста. По словам Яхины, это произведение было сначала завершено как сценарий, и потом переписано как роман. Ее удобочитаемость и динамические особенности улучшают визуальные элементы. Этот высокий уровень видимости согласуется с современным чувством людей не только в России, но и в мире, и является причиной его широкого признания во всем мире.